

## 金北山のご神体に敬礼！

西原京子

標高差 上り 横山登山口約180m～金北山1172m＝約992m  
下り 金北山1172m～石花（いしげ）登山口約300m＝約872m

5月3日（月・快晴）

金北山、1172.1m。大佐渡山脈の最高峰で両津港の北西に位置する。標高のわりに存在感があり、私たちの訪れた5月3日には沢筋の残雪を裾野の方までなびかせ、「早く登って来い！」と言わんばかりに行く手にドーンと立ちはだかっていた。今回、A隊は、この威厳を見せる金北山を横山登山口から石花登山口まで縦走、制覇してやろうとの計画である。

6:08 横山登山口到着。登山口らしい立派な入口はなく仕事道のような急登に取り付く。急坂を登ること30分。やがてトレイルは緩やかに広くなり、カタクリの群生が姿を現した。どれもお辞儀をしたように下を向き、花びらの裏を見せながら風に揺れている。謙虚な花だ。

7:30 水芭蕉鑑賞休憩。途中から登山道に沢が寄り添い、顔にまとわりつくブヨを払いのけようと横を向いた、その視線の先に水芭蕉発見。よく見ると、沢の奥が湿地になり広がっていて、一面に水芭蕉が群生していた。みんな、ズボズボと泥沼に踏み入り水芭蕉撮影。美しいものを追い求める事には余念がない。これが「さわやか」の原動力だ。



水芭蕉



カタクリ回廊



素晴らしい三角草

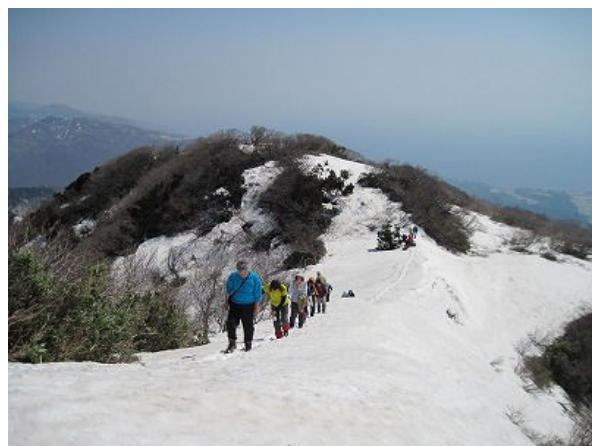


神子岩の厳しい上り

8:18 神子岩通過。ここを通過した頃から、ちらほらと雪が姿を現す。

9:10 山頂直下着。ザックをデポして山頂アタック。気がつけば、あたりはすでに雪に覆われている。つまり私たちは2時間程でカタクリや水芭蕉の咲き乱れる春から一面雪野原の冬へとタイムスリップしたことになる。自分の足で登ってきた者だけが体感することのできる山の不思議、自然の生命力。

9:25 金北山山頂。緑色のドームに挟まれ、神社がある。(なんだ！態度のでかい山のわりに、ご神体はちっちゃいんだな・・・) フンと鼻先で笑ったのが良くなかつ







金北山山頂

た。ここから石花越分岐までの縦走路が難儀きわまりなかったのは、きっとご神体の怒りに触れたからにちがいない。山の神は油断した人間の心の隙間にすかさず一撃をくわえてくるものだ。

9:40 山頂から雪道をあやめ池、鏡池方面へ出発。雪は上昇した気温のため、緩んでシャーベット状である。(この雪質ではアイゼンはきかないなあ)と漠然と思っていた。やがてトレースがない雪原が一面に広がる。別のパーティーもルートがわからず立ち往生している。後藤さんが皆を待たせてルートの確認に行く。行く手の斜面はかなり急降下している。「ここを下るから全員アイゼン装着」との指示。見下ろせば、絶壁に近い斜度。(本当にここがルートなのか)と一瞬戸惑うが、よく見ると斜面の真ん中にポツポツと足跡がみえる。

しかし、あんなところピッケルがなければとても下れない。仕方なく我々は、ブッシュの縁をブッシュにつかまりながら、後ろ向きで降りる事にした。案の定、アイゼンはまったく効かない。崩れる雪と共にすべり降りるしかない。その皆の悪戦苦闘をみて、佐々木氏がひとり勇敢にも真ん中の足跡を辿るように下り始めた。それを見た別パーティーも佐々木氏に続く。突然、佐々木氏の後ろにいた女性が滑った。佐々木氏が手を伸ばして止めようとしたが、止まらず、二人で滑り出す。それを見て驚いた後続の女性もすべり、佐々木氏は女性二人と絡まりながら滑っていった。皆が息を呑んで見守る中、下のややテラス上になった雪上で三人とも運よく止まった。

もしかしたらブッシュに激突するかも知れない恐怖と女性二人に絡みつかれている至福。地獄と天国。表裏一体。まさに人生の縮図である。とにかく無事でよかった。無事でなければ、「絡みつかれるなら、もっと若いのが良かった！」などという贅沢は言えなかったのだから。

10:30 全員無事、絶壁降下。アイゼンをはずす。9:40に山頂直下を出発してから、ここまでの短い距離に一時間近くも費やした事になる。



バック中央が雪壁



金北山

10:40 体制を建て直し出発。雪とブッシュのなだらかな上り下りを繰り返しながら進む。倒木が絡む、引っかかる、跳ね返る、行く手を阻む。やがて天狗の休場を過ぎた辺りから、雪はだいぶ少なくなってきたが、今度はコルに出る度に襲ってくる強風に体が浮き上がる。よろけながらの歩行となる。(山頂でご神体をもっと崇め奉っておけば良かった。)と今にして思うが、もう後の祭りだ。こうなったら戦うしかない。風に向かう。

12:00 イラツボ沢のコルを越えた藪の影で強風を避けて昼食。くされ雪、ブッシュ、倒木、強風の試練に耐えた身体をいたわるように腰を下ろす。枯れ草が意外と暖かい。空を見上げると快晴である。今日はこんなにもいい天気だったんだと今頃になってから気づく。

13:30 石花越分岐点到達。防衛省管理道路から山頂を越えた B 班と合流。山頂から実に 4 時間強の長い縦走路だった。石花越分岐からは普通の登山道だと胸を撫で下ろし、A 班 B 班合同写真撮影。満面の笑み。充実感をみんなが共有している。仲間って素晴らしい。

15:00 平城畑。ズンズン下る。雪がなくなると決まって花の群生が現れる佐渡の山。当初、佐渡の花々にいちいち歓声をあげカメラを構えていた面々であったが、こ





裸山は風が強い



菊咲一華

ここまで来ると「にりん草が咲いている」「あっ、そう」というモノトーンな反応になる。慣れてすべてが当たり前と思う、人の心のおろかさを金北山のご神体は黙って見下ろしている。

15：40 石花登山口着。安堵、安堵！

両津港へ向かうバスの車窓から、暮れゆく金北山が見えた。今朝、あれほど挑戦的な表情をみせていた佐渡の最高峰は今、その山並をうっすらとピンク色に染めて穏やかに佇んでいる。様々な自然と格闘しながら縦走路を越えた私たちの体にも同様に、ピンク色の夕日がヒタヒタと静かに染みてきた。

福寿草





平城畑

#### その他の報告（後藤）

- 1・ 隊は3隊に分けた。A隊＝横山登山道、B隊＝白雲台から金北山を経て石花分岐、C隊＝白雲台から金北山往復後、石花登山口に移動後、Kが平城畑まで出迎え。
- 2・ 雪は標高900m付近からかなりの積雪量だった。
- 3・ B隊は金北山に早く到着したが、風が強くて待てられないので先行した。その後、石花分岐で合流。
- 4・ A隊Sさんは金北山上りで疲れたので急遽、C隊に加わった。C隊は頂上で長時間待機してくれた。
- 5・ 雪壁は6本アイゼン、ストックでは厳しい。隊で用意しC隊Kが持っていたザイルが欲しかった。
- 6・ 石花分岐まで、ダラダラ結構長い。また、各鞍部はモーレツな風が吹く。
- 7・ 分岐からしばらく平坦地が多くルート選別は難しい。なお、殆ど登山者はいない。
- 8・ 金北山付近は無線が入らない。レーダー基地の影響か。
- 9・ 下山後、願集落の民宿「福助旅館」に向かう。下界は田植で忙しい時期だった。民宿は感じが良かった。夕食は食べきれないほどあった。
- 10・ 4日は朝食前に大野亀（167m）登頂後、朱鷺センター・妙宣寺・酒蔵を見学して11:30のフェリーで帰静。高速一車線で若干の渋滞があったが23時無事帰着した。



福助旅館





大野亀に向かう



向こうは小亀



妙宣寺



佐渡を後にする

